



本号の編集にあたっては、多くの方々のご助力をいただきました。写真の使用に関しては、東京大学アルバム編集会をはじめ多くの方々にご協力いただきました。

なお、表紙の写真は本広報誌と同じ名前の東京大学海洋研究所、研究船・淡青丸です。

編集発行 東京大学広報委員会

編集委員 大塚柳太郎  
大学院医学系研究科教授

土屋尚之  
大学院医学系研究科助教授

内野儀  
大学院総合文化研究科助教授

黒瀬等  
大学院薬学系研究科助教授

羽田正  
東洋文化研究所教授

大矢禎一  
大学院新領域創成科学研究科教授

中野実  
東京大学史料室助教授

印刷・製本 印象社

発行日 平成12年10月30日

お問い合わせ先

東京大学総務部総務課広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-3811-3393

FAX 03-3816-3913

E-mail:kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp>

URL<http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

# キャンパス散歩

ふだん何気なく行き交うキャンパス。その歴史あるたたずまいに眼を向けると、新しい発見に出会う。



散歩人



藤井恵介

## 東大の時計塔

東大に通う人々がいつもみている時計がある。だけど、目に入っても気にならないらしい。東大闘争の後に入学した頃、安田講堂写真①、大講堂。大正十四年、登録文化財で東京の第一号は荒れて内部に入らず、その時計を頼りにしたこともない。今年入学したばかりの女子学生に聞くと、毎日その前を通っているのに、教養学部第一本館の時計塔写真②(の時計は気にしたことはないという。そこで調べてもらったら、四面に時計盤があつて、時刻も正確だった。

もとの加賀藩本郷邸が文部省用地となり、明治九年に医学部の前身東京医学校写真③が移って来た時、その本館の屋根の上に立派な時計塔が乗せられていた。文字盤は四面、時計装置を持った。その音はきわめてうるわしく、本郷キャンパスのみならず、不忍池に臨む無縁坂あたりまで鳴り響いたという。続いて本部事務所と法文二学部は明治十七年に神田錦町から本郷に移転、理学部も明治二十一年に移った。J・コンドルの設計した法文二学部は本郷通りに面して、医学校とは別な方向を向いていたが、時計塔を持たなかった。理学部もそうである。

計塔そのものに見える写真④、文字盤四方。医科大学本館の時計が外されてから十数年後に、本郷キャンパス全体に君臨する時計塔が復活したのである。時計装置が付いていたが、うるさいのですぐ鳴らすのは止めたという。設計を指導した内田祥三(後の総長)は、大震災で焼失・破損した本郷キャンパスを復興し、点在する他のキャンパスに建築を続々と誕生させるが、それぞれの中心建築には時計塔を設けた。内田は時計塔にキャンパスの時をゆだねようとした、時計大好き人間の最後の世代のひとりであったかもしれない。ただし時の音は打たない。

内田の設計した時計塔で安田講堂以外に東大に現存するのは以下の通り。教養学部本館(元第一高等学校本館、昭和八年、国登録文化財)、航空研究所本館(写真⑤、文字盤四方、現在駒場IIキャンパス十三号館、昭和四年、国登録文化財)、理学部附属植物園(小石川植物園)本館(写真⑦、文字盤二方、昭和十四年)。

ふじい・けいすけ(大学院工学系研究科助教授)



参考文献 平野光雄『明治・東京時計塔記』、『内田祥三作品集』、横山正『時計塔』、鈴木博之『見える都市/見えない都市』、『東京大学百年史』他。

しかし、何故か明治二十一年に移った工科大学(写真④)には時計塔が造られた。その前身、虎の門にあった工部省工学寮の建築写真⑤、当初博物館のち生徒館)は、明治六年に建設、東京で二番目にできた時計塔を持つていた。明治期の東京名所となって頻りに話題に使われている。辰野金吾の設計した本郷の工科大学は内庭を持つT字型の建築で、奥の屋根の上に時計塔を乗せていた。本郷通りに開いた借正門(現在の正門の位置)辺りからは見えない。その鐘の音はささやかで工科大学本館付近の人々の耳によく届くほどだったという。きつと先にあつた医科大学の時計塔に遠慮して、工科大学近くからしか見えないよう、聞こえないように慎重に配慮されたに違いない。工科大学校舎は本館の後ろに増設されてゆく。

医科大学(前医学部)本館(写真③)は、明治四十四年に不用建築として取り壊されて、赤門の脇に移築され史料編纂掛の建物になった。その時、明治初年以降の時計は下ろされた。なお、昭和四十四年に小石川植物園に移築、重要文化財。

東大に大講堂が計画されたのは明治末年だが、大正十二年の開東大震災の直後に完成した建物(現存の安田講堂)は正面から見ると時

